心象は我が儘に

狐狸野類

　その臓器は私の意志に従ったり従わなかったりした。止まってくれと言えば止まらず、動いていてと願えば、今のところは止まっていない。そんな自由奔放な体の一部を、私はどうしても私とは思えず、また他人とも思えないのだ。胸に手を当てると、いつも決まって心臓の音は聞こえた。生まれてこの方例外は一つだってない。だから、私はずっと孤独ではないのだ。友達の少ないことでの苦労は少なくない人生ではあったが、孤独に負けたことだけは一度だってなかった。自殺が死因のトップを悪趣味にも飾る我ら世代ではるけれど、そういう人たちは心臓と良いご縁がなかったんだろうくらいに思っている。ないない、と続いたのでここらで一つあるあるを挟もうか。激しい運動をすると心臓も一緒に高鳴って共感の意を示してくれるので嬉しい。あるある～。

　例によって共感されたことはない。

　さて、時は浅夜。所はマイルーム。私は今、ひどく切ない気持ちである。出てくる唾液が全て胃液に代わってしまったときを想像してほしい。いや、そんな状況はあり得ないのかも知れないけれど、とにかく酸っぱくて焼けるようなのだ。吐き出さずにはいられない。私は布団に潜り、暗がりのなか己の胸に手を当てた。力強い拍動に身を寄せる。こぶし大の友達へ。

「ねぇねぇ、ゾウ君。私は切ない。丸々と太ったイチゴが存外甘くなかったときのように…」

「どうしたの、ココロちゃん。そんな辛気臭い顔して」

　やけにリズミカルな方が心臓だ。親切に言うなら後者である。私は彼の顔を見たことがないけれど、優しくて女々しくて理性的なので私によく似ているのだと思う。

「わかる？　この辛気臭さが。実は、話したいことがあるの。聞いてくれる？」

「もちろん。こういうとき一人で塞ぎ込むのは何よりの悪手だ。僕はむしろ、頼んで君の聞き手となろう」

「流石、心の友よ」

「「あっはっは」」

私は少しだけ部屋のドアに気を配ってエッヘンと咳払いをすると、次のように続けた。

　そう、あれは六限目、教師たちに良いように使われている総合の時間のことである。私はただ、ポカポカさせてくる斜陽の下、マイ腕枕を堪能していた。美鈴せんせの言の凶刃がもうそこまで迫っているとも知らずに。

「やい、心。あなた、今の今まで寝てたわね」

むくりと体を起こす。袖でまぶたを擦りながら言った。

「ごめんなさい美鈴せんせ。おはようございます、美鈴せんせ。そう、今の今まで寝てました。授業が始まったなら叩き起こしてくだされば良かったのに」

　大きなため息が最後尾のこっちまで聞こえてくる。

「こんにちは、ね。あなたは知らないでしょうけど、先生は今までとても大切なお話をしていたのよ？」

　やはり、美鈴せんせは優しい。彼女は怒る前に自己を顧みる先生だ。その優しさに免じて、だから寝るのだとは言わないでおく。

「あなた、将来の夢は？」

　ふふん。なるほど、この授業の全容を掴んだ。こういうときのために考えておいたとっておきを出すか。私は極めて真面目ではきはきしていた。

「不老不死です。」

教室の隅々が沸く。せんせも例外に漏れない。

「確かにあなたは不老不死って感じよね。でも、そうじゃなくて。職業で言うと？」

察していなかった訳ではないけれど、満を持してのつまらぬ返しである。だから私も、同じく満を持して、恐らくつまらぬこの言葉を贈ろう。
「ないです。」

「……というわけだよ、ゾウ君」
私は当時の感情が風化してしまわぬよう細心の注意を払いながらゆったりと語り終えた。
「トクントクン、なるほど」
話途中、常にトクントクンと、相槌を打っていたゾウ君である。よく聞いてくれていたには違いない。
「して、ココロちゃん。君は何が言いたいの？　昼寝を邪魔されたことへの恨み言ってわけじゃなさそうだけど」
そりゃそうだ。その気があれば本人に言っている。要件は『大切なお話』の方にあった。
「うん、あのね、私が納得いかないのは将来の夢についてのくだりだよ」
「不老不死。どうやら君の答えは先生の求めたものとは違ったようだね」
「そう！　そこなのだよ。私は恭しく、至極真っ当に応えたつもりだった。だのに言ってみればどうだ。そうじゃない？　そりゃあ私だって察する部分はあったけれど、死にたくない老けたくないと言っただけではないか。それを否定するとは何事か！不遜にも程がある」
「まぁまぁ、落ち着いて。顔が赤いよ。度を超えて酒の入った大人みたいだ」
それは酷い顔だ。自分が道端に吐いた胃の内容物の後始末さえできなさそう。私は大きく息を吸い、言葉と一緒に吐き出す。
「ごめん、口を悪くした……」

「いいんだ。僕も一理ある。共感どころか共鳴するよ。トクントクン。君は正直に答えただけだもの。それにしても、やはり学校で言う将来の夢とは、なりたい職業のことなのだね」
「そうだよ」
実際そうだ。今よりはまろやかだったかもしれないけれど、小学校のときからそれらには具体性が求められてきた。
「ちなみに、他のクラスメイトは何て言ってたの？」
先述した話の後、私はふてくされながらも、授業自体は聞いていたのだ。いくつか覚えがある。
「うーん、そこまで多くの人がちゃんと決まっていたようではなかったけれど、公務員、建築系とか、外国行くって人もいた。あと、ユーツーバーもいたで。ユーツーバー」
「そう、足りないなぁ」
「何かがあって当然みたいな言い方だね」
「目的だよ。その職業になる目的。なりたいって言っても肩書だけあって満足するわけじゃないでしょ」
「言わなかっただけじゃあないの？」
「でも先生はそれで満足しちゃったんだ」
私は考える。確かに我ら学徒の将来の生活を危ぶむのなら、働き口は無くてはならないだろう。
けれど、
「将来の夢に具体的な職業を挙げることほど夢のないこともないだろうに」
ゾウ君は、物憂げにつぶやいた。
「然り。然りだよ！　順序が入れ替わっているじゃあないか。職業なんてのは己のしたいことを叶える手段に過ぎないはずだ。金持ちになりたいのはその金で買えるものに夢を見るからだ。ある職業になりたいと思うのだって、その職業だからできることに憧れるからに過ぎない！」
「うんうん。少なくとも日本の教育にそういった要旨のすり替えがあることは否定できぬであろう。将来の夢はただのいつかやってみたいこと、くらいで良いはずなんだ。勤労なんてしたくない人がほとんどだろう。でもしなきゃ生きていけない。だから、大人が勝手に気を使って夢なんて飾ってみせたんじゃないかな。子供たちは今迷っている。自分のしたいことと、そのためのこと、曖昧になった境界によって」
「私、明日この気付きを先生に言ってみるよ……。夢とは、……!?」
そのとき、私に電撃が走るのを聞いた。背筋が引きつり、しばらく動けなくなる。呼吸を思いだすと、過呼吸になるほど横隔膜を働かせた。
「大丈夫か！　ココロちゃん！」
「私は、最初に、切ないのだと、言ったな……」
ぜぇぜぇ、詰まりながらもひねり出す。
「その感情の出どころに気付いてしまったよ…。最初は自分がいじけてるだけだと思っていたけれど」
不老不死。それは私が心から願うことだった。
「私欲張りだから、やりたいことといっぱいあるんだ。世界中のおいしいものを食べ尽くしたいし、地位も名誉も金もほしい。しかし、それにはどうしても時間的制約が邪魔なのだ。だから私は不老不死になる必要があった。Are you ok?　ゾウ君」
「いえっさあ…」
「私、漠然と死なない気がしてたし、今んとこ老けてないし生きてるしで不老不死だわぁ、って思ってたの…。

でも、夢って現実の対義語じゃないか。現実とは一番程遠い。それを知っていながら私は夢として不老不死を掲げたのだ。他ならぬ私がッ、そう自覚していたのだ。だから…わた、私は不老不死ではないのでは…」
「待て！　でも夢は決して叶わないものじゃない。それはわかっているだろう⁉」
ゾウ君はいつもの規則正しいリズムをとち狂わせて叫んだ。
「けれど、その可能性を考えてしまった今、私は不安でたまらない…。だって、人類未曾有の境地だぞ…」
彼は一層調子を強める。
「生きることを諦めるな。その夢は、僕のものでもあるのだ」
全身を揺らすほどに胸が打たれる。
「私、死にたくない…。ゾウ君、これからも、ずっと動いていてくれる？」

　しばらくして、彼女は眠りについた。頬に伝った涙を徐々に乾かしながら。時は深夜、心臓は絶えず鳴動している。彼女の見る夢とは無関係に。